

コーパスデータに基づく 英文ビジネス文書のテキスト構成パターンの分析^[1]

染谷 泰正
(青山学院大学)

Abstract

The purpose of this paper is to present a Generic Conceptual Model of Business Messages constructed on the basis of computational analysis of some 330 business letters, memorandums and e-mails selected randomly from a large corpus of business correspondence. As a starting point, the paper first reviews a model proposed by Ghadessy (1993) and concludes that his model should be modified in several respects to make it more viable as an analytic tool. It then goes on to propose several alternative constructs with which to build a new model. After discussing some of the major features of the new model in some details, the paper also looks into typical linguistic realization patterns (LRPs) of the "opening" and "closing" segments of business messages. It was found that only 20 LRPs cover about 46 percent of all the instances of the opening segment. The closing segment was also found to consist mostly of a finite number of "formulaic" expressions characteristic of written business discourse. Although further research is necessary to make any conclusive claim as to the subject matter of this paper, it is this author's belief that the Conceptual Model proposed herein will prove useful not only as an analytic tool, but also for pedagogic purposes for business writing instructors.

． 本研究の目的

ビジネス文書には一定のパターンがあることはよく知られている。ただし、その実態は必ずしも明らかではない。また、現在提案されているモデルの多くは、もっぱら個々の提案者の経験的な判断に基づいたものであり、反証可能な理論的枠組みやデータによる裏づけを持たないことが多い。本研究は、独自に構築した「英文ビジネスレターコーパス」に基づき、一般的な英文ビジネス文書のテキスト構成パターンを抽出するとともに、これを実践的・教育的視点からモデル化しようとする試みである。なお、議論のための理論的な枠組みとしては、おもに Ghadessy (1993) と染谷 (1986, 1989, 1998) を使用する。

． 先行研究

1970 年代以降、いわゆる ESP (English for Specific Purposes) 研究が進展し、専門領域別の英語の特徴が詳しく記述されるようになった。しかし、これまでの ESP 研究の中心は学術分野および科学技術分野であり、ビジネス分野における研究は大幅に立ち遅れてきた (Dudley-Evans & St John, 1996: pp. 1-13)。この分野での重要な研究が開始したのはようやく 1980 年代に入ってからで、とりわけハリディーの機能文法をベースにした研究が目立って多くなってきている。

まず、ビジネス文書のレトリック構造に関する代表的な研究として Johns (1980) や Hyland (1998) が挙げられる。いずれも Halliday and Hasan (1976, 1985) の枠組みに基づいた研究で、前者はビジネス英文における各種の結束関係 (cohesion) の分布とその使用実態について調査し、後者はビジネス文書に特有な説得のための修辞構造を“metadiscourse”という観点から分析したものである。いずれも定量的に把握可能な言語現象に着目し、その出現頻度や分布パターンを分析することでビジネス文書の特性を明らかにしようとしたもので、今後の研究のためのひとつのモデルを提供をしたものとして意義のあるものである。また、ビジネス文書の修辞構造に関する異文化比較を行った研究として Jenkins and Hinds (1987), Nikerson (1993), Park *et al.* (1998) などがある。いずれも、従来、対照分析研究の分野で言われていたこと (例えば Kaplan 1966, 1967, 1972; Hinds 1987, 1990; Norton 1987 など) を追認する内容であるが、このうち Park *et al.* (1998) については、韓国式英文レターの特徴として形式的な「緩衝の前置き」(Introductory Buffer) の存在を指摘し、さらにその言語的な実現形式をいくつかのタイプに分けて詳細に分析している点が注目される。

このほか、本研究との関連で最も重要な研究のひとつとして Ghadessy (1993) がある。Ghadessy は、現在、談話構成分析のための理論的モデルとして広く採用されている Sinclair and Coulthard (1975) の“spoken discourse”のモデルを援用しながら、独自に構築したビジネス文書コーパスの分析に基づいて、概略、次のような簡易モデルをビジネス文書の構成分析のためのフレームワークとして提示している (Ghadessy 1993, p. 153)。

I^{(R/I)n}R

where,

I = Initiation; R = Response; ^ = followed by; () = optional element.

このモデルは、まず最初に何らかの文書が出され (Initiation = I₁)、その後これに対する返信 (Response = R₁) が続き、これが I₂ となって R₂ へとつながりながら、必要に応じて *n* 回繰り返される、というものである。これを文書によるビジネス・コミュニケーションのマクロ構造とすれば、それぞれの“turn”に相当する一通のビジネス文書の内部構成は、およそ次のような公式で示すことができる (Ghadessy, *op. cit.*, p. 163 に基づく)。

M GR^{(RF[^])AI[^]C[^]CC}

where,

M = Message; GR = Greetings; RF = Reference to previous correspondence; AI = Addressing the Issue; C = Closing; CC = Complimentary Close; () = optional element.

このモデルは、M (Message) は GR, RF, AI, C および CC の 5 つの構成要素から成ることを示すが、このうち RF は第 2 信以降で追加される要素である。GR はいわゆる冒頭啓辞 (opening salutation) に相当し、CC は結尾敬辞 (complimentary close) に相当する。また、RF は旧情報を担い、新情報は AI または C のいずれかのステップにおいて提示される。Ghadessy は、このようにまずビジネス文書によるコミュニケーションの基本的な構造的フレームワークを提示したのち、Hasan (Halliday and Hasan, 1985: Chap. 4) の“generic structure potential (GSP)”=「ジャンル構造の選

択可能性」[注2] の概念を援用しながら、次のように結論付けている。

“It is concluded that the chain-like quality of written business communication is a function of two obligatory elements, RF and C.” (Ghadessy, *op. cit.*, p. 149. *Partly modified.*)

この結論から、Ghadessy はビジネス通信文において「義務的な要素」であり、かつその GSP を決定付ける RF と C の言語的具現形式 (linguistic realization patterns = LRPs) についてさらに詳しい分析を行ない、例えば RF については表 1 に示すようなパターンをその代表的な例として挙げている。

表 1 “RF” 要素の代表的具現形式 (Ghadessy, 1993, p. 155)

With expression of gratitude	N	%
Thank you for . . .	19	31.7
Thank you very much for . . .	5	8.3
We thank you for . . .	3	5.0
We acknowledge with thanks . . .	2	3.3
We are pleased to receive . . .	1	1.7
Without expression of gratitude	N	%
With reference to . . .	6	10.0
We refer to your . . .	6	10.0
Further to your . . .	3	5.0
We have received . . .	2	3.3
I refer to your . . .	1	1.7
We regret to receive . . .	1	1.7
We are in receipt of . . .	1	1.7
Upon receipt of . . .	1	1.7
Others	9	15.0
Total	60	100

(No. of Samples = 60 [out of 566])

C については “It is a link between the discourse up to the present moment and what will or may happen afterward.” と定義し、さらに “[It] can be a request for a recommended course of action (CR) or a promise by the writer (CP). The CR can be an invitation for further communication (CRI) or a directive (CRD) . . . The C element may include an expression of hope, gratitude, concern, etc. etc. (this type of C is labeled as CG) and then a request or invitation for further communication.” (p. 160) と述べてそのタイプを機能別に分類し、それぞれの典型例として次のような表現形式を挙げている [注3]。

- We would be grateful if you could send us . . . (CRD)
- Kindly treat these papers as confidential . . . (CRD)
- Please feel free to contact me if . . . (CRI)
- I will be delighted to personally handle your . . . (CP)
- We thank you for your interest in . . . (CG)
- Once again thank you for . . . (CG)
- (We) hope that our quotation is accepted and we look forward to . . . (CG+CRI)

このほか、Ghadessy は分析対象としたデータの語彙的特徴についても言及しているが、これについては “Among the most frequent lexical items that are used (*in the introductory part*) are: LETTER (51 %), APPLICATION (5 %), REMINDER (5 %), and ENQUIRY (15 %). Other less frequent items -- a total of 19 % -- included INTEREST, FORM, COMPLAINT, CABLE, RECEIPT, RECORD, ACCOUNT, STATEMENT and DEMAND.” (p. 152, イタリックは筆者) と述べているのみで、詳細は不明である。ただし、前述の RF および C 要素に限ってみても、例えば would, could, if, please, feel free, contact, kindly, grateful, delighted, personally, once again, hope, look forward to などの特徴的な語彙項目を挙げることができ、これらの分布と使用パターンを緊密に調査することで、「語彙」レベルの分析を「文」および「談話」レベルの分析へと展開していくことは、十分に可能であるものと思われる（詳しくは Someya (1999) 参照）。

・ Ghadessy モデルのおもな問題点と本研究における論考の対象

本研究は、概略上述のような Ghadessy の議論を出発点として、そのモデルの妥当性をデータに基づいて検証しながら、これをより具体的・実践的な観点から補強しようとするものである。ここでは、この Ghadessy モデルのうち、とくに 「ビジネス通信文の義務的な要素であり、かつその GSP を決定付ける」とされる RF と C に関する問題点について、以下の3点にポイントを絞って議論する。

- (1) まず、RF がその定義どおり返信にのみ適用されるものとするれば、このモデルでは初信は $M \text{ GR}^{\wedge} \text{AI}^{\wedge} \text{C}^{\wedge} \text{CC}$ ということになるが、これは実際のデータを正しく反映しているとは言えない。
- (2) また、C については Ghadessy も “It is a link between the discourse up to the present moment and what will or may happen afterward.” と述べているとおり、テキスト構成機能上、明らかに2つの異なった役割を果たしている。ビジネス文書の構成モデルの構築に当たっては、この点を明示的に示す必要がある。
- (3) さらに、Ghadessy モデルでは、それぞれのパーツを内容的あるいは構造的に結束する要素についての明示的な言及がなく、各要素は「自動的」に結束するものと見なされている。

以下、上記の点を中心に Ghadessy モデルの修正案を検討し、併せて、ビジネス文書の義務的要素としてその重要性が高い RF (= INI に修正) と C (= CLS に修正) について、それぞれの具体的な言語形式について考察する。

． 分析の枠組みと手順

本研究では、分析のための基礎データとして、筆者の作成した「英文ビジネスレターコーパス」(BLC Ver. 2000) を使用した。このコーパスにはおもに英米で発行されているビジネスライティングのテキストから採録したおよそ 120 万語（総文例数=約 11,600）のデータが収録されている [注 4]。

準備作業として、まずこのコーパスからランダムに 333 文例を抽出し [注 5]、それぞれの文例に「初信」と「返信」の区別をするためのタグを加えた (e.g., <FST> = First Letter 初信; <RES> = Response 返信)。これは初信と返信とで文書の構成に何らかの違いがあることが予想されるからである。さらに、個々の文例を「導入部」「展開部」「結部」の 3 つの構成要素に分け (染谷 1986)、それぞれに対応するタグ (e.g., <OPN>, <MDL>, <CLS>) を加えた。なお、それぞれの具体的な内容にかかわらず、各文例の第 1 パラグラフと最終パラグラフをそれぞれ「導入部 (OPN)」および「結部 (CLS)」と定義し、その間の文要素はすべて「展開部 (MDL)」とした。ただし、全体がひとつの段落で構成されている “one-paragraph message” については当該段落を一律に「導入部」と認定した。

このうち、本研究ではとくに <OPN> と <CLS> の 2 つの要素に焦点を絞って分析した。Ghadessy も述べているとおり、この 2 つはどのようなビジネス通信文にも見られる義務的要素であり、テキスト構成的観点から見てもその重要度が高いからである。<OPN> についてはⅢの (1) で述べたような観点から Ghadessy の RF 要素の代替案として INITIATOR (= INT) という概念を提案し、これがどのような形で具現化されているかを見た。なお、ここでは INITIATOR を「当該メッセージを書くきっかけとなったことがら」と幅広く定義しておく (染谷 1989, pp. 190-196)。<CLS> については、まず各センテンス要素をそのテキスト構成的機能に応じて「内部照応的 CLS」(Endophoric CLS = CLS Type 1) と「外部照応的 CLS」(Exophoric CLS = CLS Type 2) の 2 つに分け (Ⅲの (2) 参照)、さらに 後者を前述の Ghadessy の分類を援用しながら <CR> <CP> <CG> などの発話行為別タイプに分類した [注 6]。このうち、Type 2 はとくにビジネス文書によるコミュニケーションの循環的性格 (Ghadessy の表現では “chain-like quality of written business communication”) を実現するものとして重要な要素である。このほか、<OPN> <MDL> <CLS> の各要素を通じて最も情報価値の高い新情報を含む語句要素を「キーワード」と認定し、これに <KEY> というタグを加えてマークした。これは Ghadessy モデルにおいては明示的な言及がない「テキストの各パーツを内容的および構造的に結束する要素」に相当するものであり (Ⅲの (3) 参照)、その分布と実現形式を詳細に分析することで、ビジネス文書におけるテキストの結束性がいかにして確保されているかについての新たな洞察が得られるものとする。

なお、現在のところこれらのタグ付けをすべてコンピュータで自動的に行うための適切なアルゴリズムが存在しないことから、一部のタグ付け作業は手動で行った。その後、タグ付けされたデータについて、簡易言語 AWK (一部、Perl) を使って簡単なプログラムを組み、必要な分析・集計作業を行った。図 1 にデータ分析の手順を、表 2 におもなタグの種類をそれぞれ示す。

図1 データ分析の手順

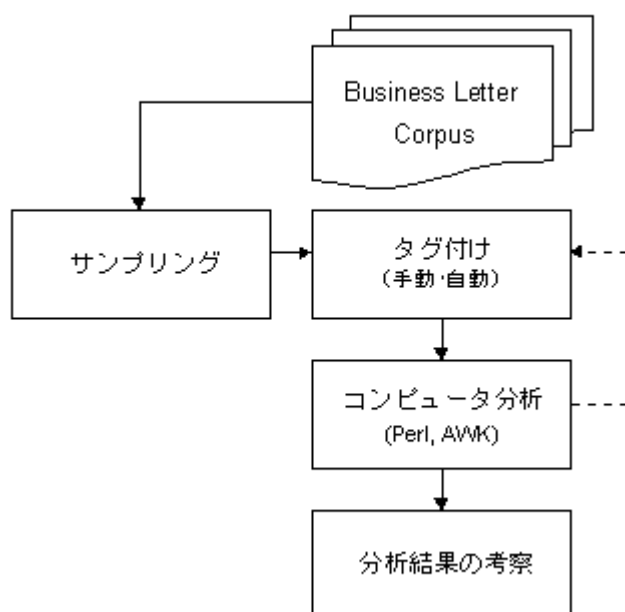


表2 おもなタグの種類

タグ	内容	タグ	内容
<GR>	Salutation	<INT>*	Initiator
<OPN>	Opening Paragraph	<KEY>*	Keyword
<MDL>	Middle Paragraph(s)	<MD_MKR>	Modal maker
<CLS>	Closing Paragraph	<TX_MKR>	Textual marker
<P>	Paragraph break	<CC>	Complimentary close
<T1>*	Endophoric CLS (= CLS Type 1)	<FST>	First letter
<T2>*	Exophoric CLS (= CLS Type 2)	<RES>	Response letter

* 印のものは手動タグ付け。Modal/Textual Markers については Hyland (1998) の分類を援用した (詳しくは 染谷 (2001) 参照)。

結果と考察—その1

図2aは上記のスキームによってタグ付けされたテキストの例である。このうち、タグ部分だけを抽出することで図2bに示すような簡易テキスト構造表示を得ることができる。この作業をすべてのサンプルに対して行った後、その結果を各サンプルの構造的類似性によって Type 1 から Type 5 までの5タイプ別に分類し、表3に示すような分布を得た [注7]。

図 2a タグ付けされたテキストの例

```
# <FILE ID = Alex, 1995>
# <DOCUMENT NUMBER = No. 001>
# <DESCRIPTION = Case 1-A: REQUESTING FREE MATERIALS>

<GR>Dear [NAME]:</GR>
<P>
<OPN>I am writing to ask you to send me a copy of <KEY>your booklet, The ABC's of Making
Motion Pictures</KEY>, which, <INT>according to an article in the June issue of Modern Office
Training</INT>, you are providing free of charge to business firms. I am myself planning to
produce films to train clerical personnel, and I believe <KEY>your booklet</KEY> will be of
great help to me in my work.</OPN>
<P>
<MDL></MDL>
<CLS><T1>Thank you very much for your kind attention to this request</T1>, and <T2>I look
forward to receiving <KEY>the booklet</KEY> soon.</T2></CLS>
<P>
<CC>Sincerely yours,</CC>
```



図 2b タグ抽出による簡易テキスト構造表示*

```
<GR>
  <OPN><KEY><INT><KEY>
  <CLS><T1><T2><KEY>
<CC>
```

* <MDL></MDL> のように開始タグと終末タグの間が空文字列である行は自動的に無視するようにプログラムされているため、図 2a 中の <MDL> 要素は図 2b においては消去されている。

表3 サンプルデータの構造的類型とその分布 (N=333)

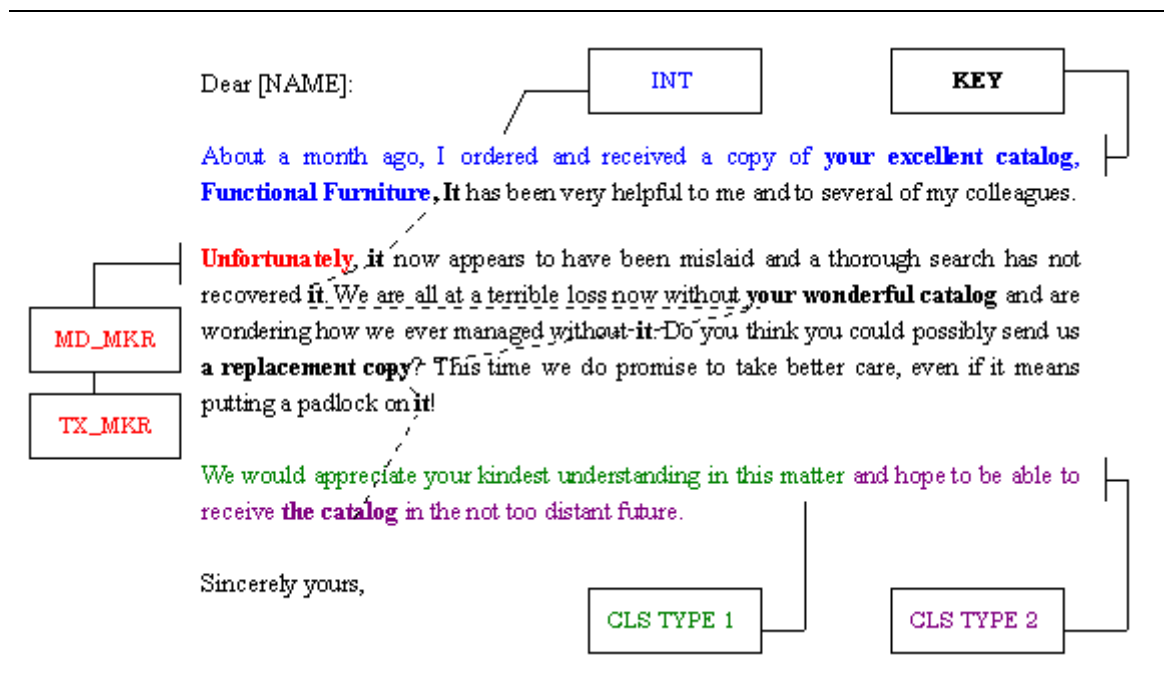
タイプ	構造的類型	%
Type 1	<GR> <OPN><INT><KEY><KEY> <MDL><MD_MKR><KEY><KEY><KEY><KEY><KEY><KEY> <CLS><T1><T2><KEY> <CC>	37.2
Type 2	<GR> <OPN><KEY><INT><KEY> <CLS><T1><T2><KEY> <CC>	25.0
Type 3	<GR> <OPN><INT><KEY><KEY><KEY> <MDL><TX_MKR><KEY><KEY><KEY> <MDL><TX_MKR><KEY><KEY><KEY><TX_MKR><KEY><KEY><KEY> <MDL><TX_MKR><KEY><KEY><MD_MKR><KEY><KEY> <MDL><MD_MKR><KEY><KEY> <CLS><T2><KEY> <CC>	22.8
Type 4	<GR> <OPN><INT><KEY><TX_MKR><KEY><T1> <CC>	11.5
Type 5	<OPN><INT><KEY><TX_MKR><KEY><KEY><T1>	3.5

なお、各サンプルデータのタイプ認定に当たっては、それぞれのデータについて各行の先頭にあるタグを走査してその一致度を調べるようにした。このうち Type 3 の <MDL> の数は複数個であることが条件で、必ずしも4つとは限らない。

この5つの構造タイプのうち最も多く見られた類型は Type 1 (37.2%) で、<GR>と<CC>の間に <OPN> <MDL> <CLS> の各パラグラフがそれぞれひとつずつ挿入される、というものである。参考までに図3に Type 1 の実文例とその分析例を示す [注8]。これを見ると、第1パラグラフでは冒頭の第1文がこのテキストの <INT> で、その中に <KEY> (“your excellent catalog, Functional Furniture”) 要素が含まれ、これが代名詞化されて第2文の主語（および主題）となっていることがわかる。この <KEY> 要素（図3では太字で示されている）は、第2パラグラフにおいて6回、最終パラグラフで1回ずつ繰り返され、全体の構造的および内容的結束性を高めている。また、全部で9つの <KEY> 要素のうち6つが代名詞化されている点も結束性の強化という観点から重要である。第2パラグラフでは冒頭に Unfortunately という文副詞が使われているが、これはその後続く命題に対する書き手の判断・評価を示すという意味で <MD_MKR>と定義することができる [注9]。第3パラグラフは、前半部が内部照応的 CLS (= CLS Type 1)で、後半部が外部照応的 CLS (= CLS Type 2) である。この例でも明らかなおとおり、内部照応的 CLS は通例 <MDL> (<MDL> がない場合には <OPN>) における記述内容 (“the discourse up to the present moment”)

に言及し、外部照応的 CLS は当該メッセージがその実現を意図しているところの将来における事柄 (“what will or may happen afterward”) について言及する。

図3 Type 1 の実文例 (カラー構造化テキスト) とその分析例



この Type 1 の類型のうち <MDL> に相当する段落要素がなく、<OPN> の後にただちに <CLS> が続いているものが Type 2 (22.8%) のパターンで、前出の図 2a に例示した文例がこれにあたる。これに対して複数の <MDL> 要素が見られるものはすべて Type 3 (22.8%) に分類した。なお、表 3 の例では Type 3 の <MDL> の数は 4 つになっているが、今回分析したデータの中では 2 つから最大 5 つまでの例が見られた。ただし、そのほとんどは 2 つないし 3 つのいずれかである。Type 4 (11.5%) は <GR> と <CC> の間に <OPN> 要素のみが見られるもので、いわゆる “one-paragraph message” の例である。このうち、<GR> と <CC> 要素が省略されているものを Type 5 (3.5%) とした。なお、Type 5 はいずれも電子メールを含む社内メモランダム (interoffice memorandum) の例で、Type 4 もその多くは電子メールおよびメモランダムの例である [注 10]。

以上のような分析結果から、一般的なビジネス文書は Type 1 の [GR [OPN+MDL+CLS] CC] という構造パターンを標準類型として、必要に応じてその組み合わせを適宜調整しながら構成されていることが明らかになった。また、これらの 5 つの構造類型のいずれにおいても共通するものとして、<OPN> における <INT> と <KEY>、および <CLS> における <T1> または <T2> (またはその両方) が介在していることから、<INT> <KEY> <T1/T2> の 3 要素は文書によるビジネスメッセージにおける「義務的要素」(obligatory elements) として重要な役割を担っていることが確認された。この 3 つの義務的要素に関する制限事項および特徴は以下のようにまとめることができる。

- <INT> 要素は必ず <OPN> の中に含まれていなければならない。
- 少なくともひとつ以上の <KEY> 要素が <OPN> の中に含まれていなければならない。
- 通例、<KEY> と <INT> は KEY INT の関係にあることが多い。ただし、KEY は構造的に INT から独立して存在することもできる。
- <INT> と <KEY> の出現順序 (=文中の位置関係) は問わない。
- <OPN> 以降の段落要素においては少なくともひとつ以上の <KEY> 要素が出現していればよい (例えば 表 3 に例示した Type 1 の<MDL>には 6 つの<KEY>要素があるが、これは 6 つである必然性はなく、ひとつ以上であれば原則としていくつでもよい。ただし、一般に <KEY> の出現数とそのテキストの結束性の高さには正の相関が認められる)。
- <KEY> 要素は初出のもの以外は代名詞化 (pronominalization) および同一ないし非同参照反復 (reiteration with or without identity of reference) される傾向があり [注 11]、これらはいずれも当該テキストの構造的・内容的結束性をより強化する機能を果たしている。
- <CLS>* には必ず <T1> または <T2> が含まれていなければならない。(* ただし Type 4 および Type 5 の構造タイプにおいては <OPN> の中に含まれる)
- <T1> と <T2> は相互補完的な関係にあり、両者はしばしば共起して使われる。ただし、この共起関係は義務的ではない。
- <T1> と <T2> の区別は必ずしも明瞭であるとは限らず、またいずれか一方がもう一方の機能を同時に果たすこともある。

図 4a は、上述の「標準類型」としての構造パターンを、実践的・教育的な見地からより直感的に理解しやすい形でモデル化したものである。図 4b はその“one-paragraph message variation”で、表 3 の Type 4 および Type 5 に直接対応する。なお、<GR>と<CC> についてはしばしば省略されることがあることから、オプショナルな要素としてこのモデルでは明示化していない。<TX_MKR>と<MD_MKR>も同じく原則としてオプショナルな要素であるが、今回の分析結果でも明らかなおおりに、これらの要素は何らかの形で各文例中にほぼ必ず出現していることから、これを準必須要素として位置付けるのが適当であると判断した [注 12]。

図 4a 英文ビジネス文書の一般構造モデル
 (Generic Conceptual Model of the Business Message)

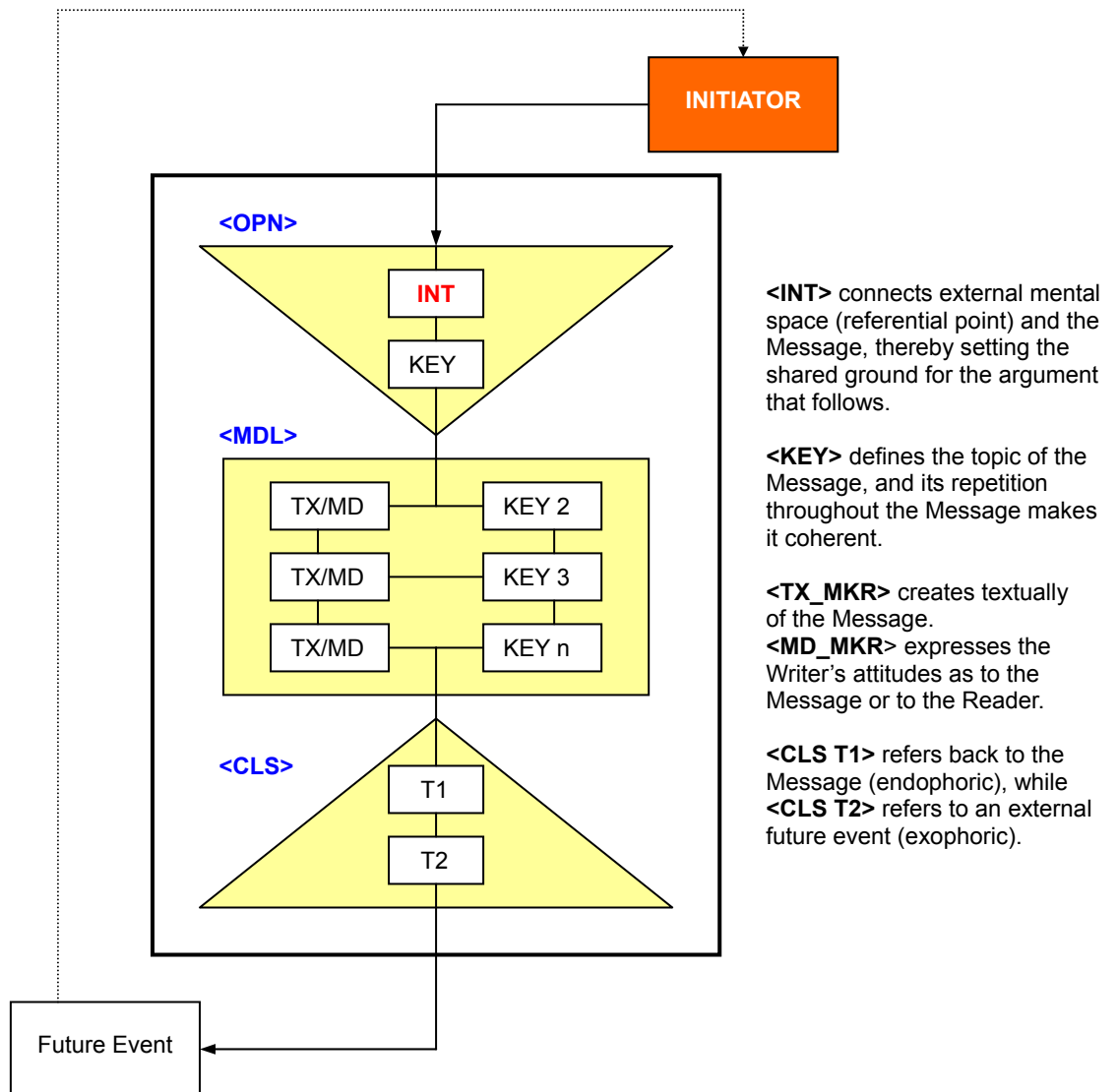
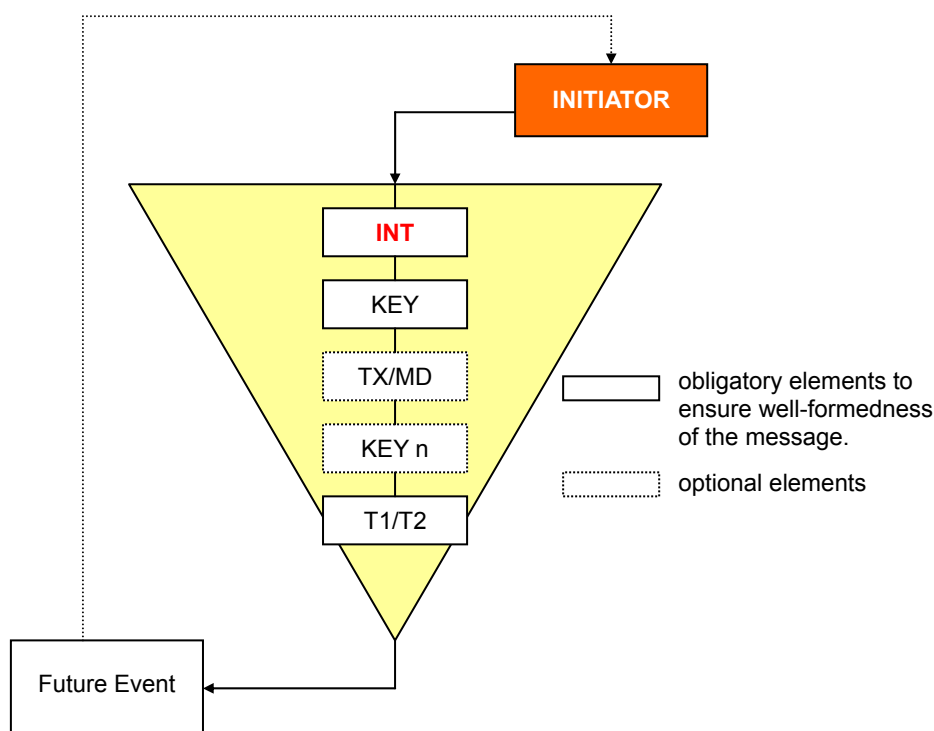


図 4b 「一般構造モデル」の “one-paragraph message” バリエーション



以上、Ghadessy (1993) の先行研究を批判的に検討しながら、独自に構築した「英文ビジネスレターコーパス」の分析に基づいて一般的な英文ビジネス文書のテキスト構成パターンをモデル化した。これは、結果的に染谷 (1986, 1989, 1998) においてすでに提示されていたモデルの妥当性を具体的なデータで裏付けるとともに、その内容を一部修正し、補足するものである。次節では、このモデルの義務的要素であり、テキスト構成上その重要性が高い <OPN> と <CLS (T1/T2)> について、それぞれの具体的な言語的実現形式 (LRPs) について考察する。

． 結果と考察—その 2

(1) サンプルデータから得られた <OPN> の LRP フレーム

前述のとおり、<INT> および <KEY> は義務的要素として必ず <OPN> の中に含まれていなければならない。また、通例、KEY は INT の一部としてその中に含まれることが多い。つまり、OPN, INT, KEY の 3 要素は OPN INT KEY の関係にあるということができる。ただし、教育的な観点から見た場合、単にこのように相互の関係を定義付けるだけでは不十分である。これらの要素が具体的にどのような言語的実現形式 (LRPs) をとって現れるのかを明らかにする必要がある。

ただし、通例、語または句として実現される <KEY> 要素の具体的な内容は言うまでもなく千差万別である。また、<INT> についても「当該メッセージを書くきっかけとなったことがら」はケースバイケースであって、その具体的な言語的実現形式もまた個々のケースによって異なってくる。したがって、これらの要素のパターンを見るためには、OPN INT KEY という関係の最上位の位置にある <OPN> の実現形式を「文フレーム」という観点から調べるのが最も適切な方

法であると考えられる。そこで、前出の図 2a に示したような形式でタグ付けされたデータから <OPN> タグが付された行だけを抽出し、その統語的パターンを比較・分類した。その結果、表 4 に示すような類型が見られた [注 13]。

表 4 <OPN> 要素の LRP フレーム (N=333)

LRP フレーム*	N (%)
01. Thank you [very much] for NP	93 (27.9)
02. (We are/were; I am/was) pleased to VB NP	23 (6.0)
03. We appreciate (NP; VBG NP)	20 (6.0)
04. Please accept our thanks (<i>or other expressions of gratitude, wishes, sympathy, or regrets</i>) for NP	7 (2.1)
05. (We were; I was) sorry (to VB NP; to VB that CP; that CP)	8 (2.4)
06. We regret (VBG NP; to VB NP; that CP)	5 (1.5)
07. (We/I) [have] received NP	19 (5.7)
08. (We/I) refer to NP	13 (3.9)
09. Reference is made to NP	9 (2.7)
10. We acknowledge [receipt of] NP	6 (1.8)
11. (We are; I am) in receipt of NP	4 (1.2)
12. This is in response to NP	4 (1.2)
13. In reply to NP + Main Clause	16 (4.8)
14. With reference to NP + Main Clause	11 (3.3)
15. In response to NP + Main Clause	8 (2.4)
16. With regard to NP + Main Clause	7 (2.1)
17. Further to NP + Main Clause	7 (2.1)
18. As per NP + Main Clause	3 (0.9)
19. (I am; We are) writing [this letter] to VB	10 (3.0)
20. This is to (VB NP; VB [NP] that CP)	6 (1.8)
21. その他	54 (16.2)

* VBG=動名詞; to VB=to 不定詞; that CP=that 補文; NP=名詞句; Main Clause=主節

[] は省略可能なオプション要素を示し、(A/B) および (A; B) は代替候補を示す。

これらの文フレームは、01~12、13~18、および 19 と 20 の 3つのグループに分けることができる。第 1 のグループはいわゆる単文型の文フレームで、第 2 のグループは「前置詞句+主節」という共通のパターンからなるものである。これらはいずれも返信 (<RES>) における文フレーム群であるが、これに対して 19 と 20 の例はおもに初信 (<FST>) において使用されている文フレームである [注 14]。この 5つのグループのうち、それぞれ「コア・フレーム」となるのは 01, 05, 07, 13 および 19 で、その他のものはコア・フレームのバリエーションであると考えてよい。ちなみに、01, 05, 07 の使い分けは、当該の命題に対する書き手の評価・判断のモダリティにほぼ一

致する。つまり、その内容が肯定的なものについては 01 を、否定的なものについては 05 を、その中間に位置するもの（あるいは主観的な評価を避けて事務的に処理したいもの）については 07 を使うということになる。

なお、これらの文フレーム中に出てくる NP の多くは *your letter* や *your fax* などのような相手からの通信を特定する名詞句で、典型的には *Thank you for your letter of April 1 concerning ...* や *In reply to your fax of April 1 regarding ...* のような形式で実現されて <INT> となる。さらに、前出の 図 4 a が示すとおり、一般にはこの後に何らかの <KEY> 要素が配置され、メッセージ全体の主題を設定する。この <KEY> 要素を導入するための語彙的・統語的手段は主として以下の 3 つのパターンに収斂することができる。

- 前置詞／前置詞句型
- 関係代名詞型
- 動名詞型

このうち前置詞／前置詞句型は主として *about*, *concerning*, *regarding* の 3 つの前置詞を中心に、*as to*, *with regard to*, *with respect to*, *in relation to* などの前置詞句を適宜配置して <KEY> 要素を導くもので、関係代名詞型は例えば *Thank you for your letter of April 1 in which you informed us of...* のように関係詞を配置して文法的に完結した節を続けるというものである [注 15]。後者は <KEY> 要素が語または句の単位では十分に表現できない場合に選択されるパターンである。動名詞型は上述の関係詞節中に出てくる動詞を *ing* 形にしてより簡潔な表現にしたもので (e.g., *Thank you for your letter of April 1 informing us of ...*)、この統語パターンと共起する動詞としては *inform*, *ask*, *inquire*, *advise*, *suggest*, *propose*, *explain*, *confirm*, *indicate*, *give*, *send*, *enclose*, *remind* などが代表的なものである。以上述べた LRP フレームの全体を「返信」について図式的にまとめると、次のようになる (表 5)。

表 5 <OPN INT KEY>の典型的な具現形式 (返信の場合)

1	単文型の文フレーム	+ 前置詞 (句) 型の要約語
	礼を述べ 相手の通信を特定し 主題を設定する。	Thank you for (your letter of April 1) concerning (the ABC Project).
2	単文型の文フレーム	+ 関係代名詞型の要約語
	手紙の受領を知らせ その内容を要約する。	We have received (your letter of April 1), in which (you asked us to . . .).
3	導入句+主節型の文フレーム	+ 前置詞 (句) 型の要約語
	相手の通信を特定し その内容を確認して 本論に入る。	In reply to (your letter of April 1) concerning (the ABC Project), we (are pleased to . . .).
4	導入句+主節型の文フレーム	+ 動名詞型の要約語
	相手の通信を特定し その内容を確認して 本論に入る。	With regard to (your letter of April 1) asking for (our proposal for the ABC Project), we (are pleased to . . .).

() の部分は可変データ部

(2) <CLS T1/T2> の代表的具現形式 (CLS の基本定型フレーズ)

次に、<CLS> であるが、前述のとおり <CLS> は <T1> と <T2> から構成され、<CLS> は必ずこのいずれか (または両方) をその構成要素として含んでいなければならない (ただし、Type 4 および Type 5 の構造タイプにおいては <OPN> が <CLS> を兼ねるために、表層的には <OPN> の中に含まれることになる)。このうち、<T1> は「内部照応的 CLS」と定義されるもので、通例 <MDL> または <OPN> における記述内容 (“the discourse up to the present moment”) に言及する。一方、「外部照応的 CLS」である <T2> は当該メッセージがその実現を意図しているところの将来における事柄 (“what will or may happen afterward”) について言及する (図 4a のキャプション参照)。

<CLS T1/T2> の分析に当たっては、まず前出の図 2a に示したような形式でタグ付けされたデータから <CLS> タグが付された行だけを抽出し、さらにこれを <T1> と <T2> に分けた上で、「感謝の言葉を添えて結ぶ」「相手の返事・アクションを求めて結ぶ」「お詫びの言葉を添えて結ぶ」「今後につなげるための言葉を添えて結ぶ」および「その他」の 5 つのカテゴリーに分けて分類した。その結果、表 6 に示すような類型が見られた。なお、これらの類型はそれぞれについて語彙的言い換えなどによるさまざまなバリエーションがあり、また通例、他の類型との組み合わせで使われることが多い。したがって、それぞれの出現頻度を特定することが困難であるため、今回は代表的な具現形式のみを列挙するにとどめた。また、「その他」のカテゴリーはいわば rag bag 的な性格のものであることから、ここでは省略した。

表 6 <CLS T1/T2> の代表的具現形式 (CLS の基本定型フレーズ)

①感謝の言葉を添えて結ぶ	CLS Type
01. [We] Thank you [very much] for your attention in this matter.	T1
02. Your kind attention to this matter will be highly appreciated.	T1/T2
03. We [would like to] thank you again for the pleasure of serving you.	T1
04. Please accept our sincere gratitude for your cooperation.	T1
05. [We] Thank you in advance for your cooperation in this matter.	T2
06. We appreciate your cooperation in this matter(, and look forward to VBG NP).	T1 (T2)
②相手の返事・アクションを求めて結ぶ	
07. We [are] look[ing] forward to hearing from you [soon].	T2
08. We [are] look[ing] forward to [receiving] your reply.	T2
09. We would appreciate your early reply.	T2
10. May we have your reply by DATE, if possible.	T2
11. Please send us your reply by (fax; e-mail) at your earliest convenience.	T2
12. Please acknowledge receipt of this letter [by return [mail; fax]].	T2
13. We would appreciate it if you would kindly VB NP.	T2
14. It will be highly appreciated if you would let us know NP.	T2
15. We would be glad to receive information about NP.	T2
③お詫びの言葉を添えて結ぶ	
16. We are very sorry for the trouble we have given you.	T1
17. Again, (we are; I am) sorry for the delay in sending (our; my) reply.	T1
18. Again, (we; I) regret having caused you inconvenience.	T1
19. Once again, please accept (our; my) sincere apologies for NP.	T1
20. Please accept (our; my) thanks for the trouble you have taken in this connection.	T1
④今後につなげるための言葉を添えて結ぶ	
25. If you have any questions, please do not hesitate to contact us.	T2
26. We look forward to your continued cooperation.	T2
27. We look forward to the pleasure of serving you in the near future.	T2
28. We look forward to doing business with you again in the near future.	T2
29. If (we; I) may be of help to you in some other way, please feel free to call (us; me) at any time.	T2
30. If there is anything else (we; I) can do for you, please let (us; me) know.	T2
⑤その他	
(省略)	

* NP=名詞句; VB=動詞; VBG=動名詞; DATE=日付

[] は省略可能なオプション要素を示し、(A; B) は代替候補を示す。

・ まとめと今後の課題

本稿では、Ghadessy (1993) の先行研究を批判的に検討しながら、独自に構築した「英文ビジネスレターコーパス」の分析に基づいて一般的な英文ビジネス文書のテキスト構成パターンをモデル化した。この「モデル」は次のような特徴を持つ。

- Ghadessy の “RF” 要素の代替案として INITIATOR (<INT>) という概念を導入し、これがあらゆるビジネス文書の導入部に義務的に存在する要素であることを確認するとともに、導入部の GSP をより操作的に定義する方向性を示した。
- 同 “C” 要素に潜在的に含まれる「内部照応的」機能と「外部照応的」機能を明示的に分け、前者を <CLS Type 1>、後者を <CLS Type 2> と再定義した。
- 同 “AI” 要素を、より狭義に <KEY> と再定義し、これがビジネス文書の各パーツを内容的・構造的に結束する要素として主要な役割を果たしていることを明らかにした。
- <MD_MKR> および <TX_MKR> という 2 つの要素をモデルの中に明示的に導入し、これが各文書のテキスト性 (textuality) およびメッセージとしての統合性 (well-formedness) を左右する重要な構成要素であることを示した。

本稿で提示した「英文ビジネス文書の一般構成モデル」はビジネス文書の分析のための枠組みとして使うことができると同時に、ビジネスライティング指導の現場において、学習者のための実践的指針として（適切な指導のもとで）十分に活用し得るものであると考えられる。ただし、今後、「問合せ」「依頼」「発注」「確認状」「苦情」「断り状」といったカテゴリーごとのサブモデルを作成するなどして、より精緻化を図りたい。

また、本研究では、単に抽象的なレベルでのモデルを提示するだけでなく、このモデルを構成する要素のうち、とくにその重要度が高い導入部 (<OPN>) と結部 (<CLS>) について、その具体的な言語的実現形式 (LRPs) についても考察した。その結果、<OPN> についてはわずか 20 の「文フレーム」で全体の約 46 パーセントの LRP をカバーし、<CLS> においても <T1> (= CLS Type 1) と <T2> (= CLS Type 2) のそれぞれについて一定の「定型表現」(formulaic expressions) が発達し、これが文書によるビジネス・ディスコースを特徴づけるとともに、その構築に重要な役割を果たしていることを再確認した。ただし、現時点では分析が不十分であり、より精緻な分析は今後の課題としたい。なお、本研究は限られた数のサンプルについて行われたものであること、一部のタグ付けが必ずしも客観的な基準に基づいて行われたものではないこと（例えば <CLS> の <T1> と <T2> の分類）、および手動タグ付けによるエラーの可能性など、いくつかの問題点をはらんでいることを付け加えておく。

謝辞

本稿の掲載に当たっては査読者の方から貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝の言葉としたい。ただし、本稿の内容に関する責任は筆者に帰することは言うまでもない。

注

[1] 本稿は 2001 年 10 月 21 日に西南学院大学（福岡）において開催された日本商業英語学会第 61 回全国大

会での発表に基づくものである。コメンテータとして同席いただいた秋山武清先生（青山学院大学）にはこの場を借りて改めて感謝の意を表したい。なお、発表に使用したプレゼンテーション資料は以下のウェブサイトにて閲覧することができる。

[Online] [http://isweb15.infoseek.co.jp/school/kwic/BZGakkai\(61st\)/BZGakkai\(61st\)-00.html](http://isweb15.infoseek.co.jp/school/kwic/BZGakkai(61st)/BZGakkai(61st)-00.html)

- [2] 訳は算 (1991) による。
- [3] 同様の分析は染谷の一連の著作 (染谷 1986, 1989, 1991, 1998) にも見られる。このうち、染谷 (1998) では RF と C の具体的な実現形式について、前者についてはおよそ 30 パターン、後者については 45 のパターンを「基本定型表現」として提示し、それぞれについて語彙的、統語的、および語用論な観点から詳しい解説を施している。
- [4] 同コーパスの詳細については Someya (1999) 参照。なお、現在、同コーパスをフル実装したオンラインの用例検索システム "Business Letter Corpus KWIC Concordancer" がインターネット上で公開されている。URL は <http://isweb9.infoseek.co.jp/school/ysomeya/> (2002年2月28日現在)
- [5] なお、当初はデータをその出典別に米・英・混成 (日本人ライターを含む) の 3 つに分けてそれぞれ 333 例ずつ抽出し、これに予備の 1 例を追加した総計 1000 文例を対象に分析を行なう予定であったが、作業中の技術的な事故のため、最終的に米国の資料から選んだ 333 文例のみを分析対象にすることになったことをお断りしておく。
- [6] ただし、今回の分析では最終的には Ghaddey の分類を放棄して、第VI節の (2) に述べるような 5 つのカテゴリにしたがって新たに分類しなおした。
- [7] 表 3 に示す各構造タイプの分布はあくまでも今回の調査に使用したデータにおいて見られたものであって、この数字そのものに何らかの普遍性があるわけではない。あくまでも全体の傾向を示すものと考えていただきたい。
- [8] 図 3 はテキスト中に埋め込まれた構造タグを html のカラーコードに変換して、テキスト全体の構造をカラー化して示したものである。なお、本原稿ではカラー部分が適切に表示されていないが、カラー構造化テキストの実例は筆者のウェブサイトで参照することができる (URL は前記 [1] 参照)。
- [9] ただし、Unfortunately はその後続く命題が前出の命題に対する否定的な内容のものであることを予告するテキスト構造標識 (textual [discourse] marker = <TX_MKR>) としての役割も担っている。モーダル副詞の中にはこのように<MD_MKR>と<TX_MKR>の双方を兼ねて使われるものが少なからずあるが、今回の分析では既述の Hyland (1998) の分類をそのまま適用しており、このあたりの区別、あるいは個別のケースについての相対的重要度の評価といった点については必ずしも厳密には行っていない。
- [10] この点について査読者の方から「電子メールやメモランダムについては (その他の文例データとは区別して) 別枠で調査すべきである」とのコメントをいただいた。今回の調査において、電子メールとメモランダムの文例の多くが特定の構造的類型に集中していることが明らかになったが、これは「別枠で調査すべきである」という査読者のコメントの妥当性を示している。ただし、これについては今後の課題としたい。
- [11] 「同一参照反復」 (reiteration with identity of reference) および「非同一参照反復」 (reiteration without identify of reference) は Morris and Hirst (1991: 21-48) の用語。前者は I have a computer. Unfortunately, the computer is out of order now. のようにまったく同一のものについて言及し、後者は She ate some apples. She likes apples very much. のように、同一類の異なる参照物について言及しているものを指す。

- [12] <TX_MKR> と <MD_MKR> についての詳しい議論は染谷 (2001) 参照。
- [13] 表 4 に示す結果は、Ghadessy による RF 要素の代表的具現形式のリスト (表 1) と大筋において同じであるが、細かく見ると、例えば今回の分析では全体の 27.9 パーセントとなっている thank you 系統の LRP フレームが Ghadessy のリストではおよそ 45 パーセントを占めることや、sorry 系統の LRP フレームが Ghadessy のリストには見られないことなど、いくつかの違いも見られる。なお、"(I am; We are) writing..." および "This is to..." 系統の LRP フレームが表 1 に見られないのは Ghadessy の RF 要素と本稿での <OPN> との定義の違いによるものと考えられる。
- [14] なお、今回の分析ではこの 2 例以外には初信についての明確なパターンは見出せなかったが、これは、データとして使用した 333 文例のほとんどが返信を想定した文例であることが反映されているものと思われる。この点については今後の課題としたい。
- [15] ちなみに、ここではいわゆる随伴現象 (pied-piping) によって前置詞 in が関係詞節の冒頭に移動しているが、このような前置詞随伴型の関係詞の用法は多くの学習者が困難を感じているところであり、指導に当たっては特別な注意が必要である。

参考文献

- Dudley-Evans, T. and M. J. St John (1996). "Report on Business English: A Review of Research and Published Teaching Materials." *TOEIC Research Report No. 2*. July 1996. Educational Testing Service, Princeton, U.S.A.
- Ghadessy, M. (1993). "On the nature of written business communication" in Ghadessy, M. (ed.), *Register Analysis: Theory and Practice*. (pp. 149-164). London: Pinter Publishers,
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1976). *Cohesion in English*. NY: Longman Inc.
- (1985). *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*. Deakin University.
- Morris, J. and Hirst, G. (1991). Lexical cohesion computed by thesaural relations as an indicator of the structure of text. *Computational Linguistics*, Vol. 17, No. 1, pp. 21-48.
- Hyland, K. (1998). "Exploring Corporate Rhetoric: Metadiscourse in the CEO's Letter." *The Journal of Business Communication*. Vol. 35, No. 2 April, 1998 (pp. 224-244).
- Jenkins, S. and J. Hinds (1987). "Business Letter Writing: English, French and Japanese." *TESOL Quarterly*, 21 (pp. 327-349).
- Johns, A. M. (1980). "Cohesion in written business discourse: some contrasts." *The ESP Journal*, Vol. 1: 1980 (pp. 35-44).
- 笈 寿雄 [訳] (1991) 『機能文法のすすめ』大修館書店 (原著名: *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. 1985, Deakin U.P.)
- Nikerson, C. (1993). *A comparative study of business letters written by native and non-native speakers*. Unpublished Master's Thesis. University of Birmingham.
- Park, M. Y., W. T. Dillon and K. L. Mitchell (1998). "Korean Business Letters: Strategies for Effective Complaints in Cross-Cultural Communication." *The Journal of Business Communication*. Vol. 35, No. 3, July 1998 (pp. 328-345).
- Sinclair, J. M. and R. M. Coulthard (1975). *Towards An Analysis of Discourse*. London: Oxford University Press.
- Someya, Y. (1999). *A Corpus-based Study of Lexical and Grammatical Features of Written Business English*.

Unpublished MA thesis submitted to the Graduate Department of Language and Information Sciences of the University of Tokyo.

St John, M. J. (1996). "Business is Booming: Business English in the 1990s." *English for Specific Purposes*. Vol. 15, No. 1, 1996 (pp. 3-18).

Someya, Y. (1999). *A Corpus-based Study of Lexical and Grammatical Features of Written Business English*. MA Thesis submitted to the University of Tokyo.

染谷泰正 (1986; 1995 Rev.) 『ライティング・マラソン』(英文ビジネスライティング通信講座テキスト) アルク

----- (1989) 『最新英文ビジネスレター作成マニュアル』 新企画社/小学館

----- (1998) 『英文ビジネス文書完全マニュアル』 新企画社/小学館

----- (2001) 「ビジネス英語学習者コーパスに見られるメタ・ディスコースマーカーの分布と使用傾向の定量的分析」(Use of Metadiscourse Markers in Business Letters Written by Japanese Learners of EBP). 日本商業英語学会関東支部例会発表論文 (1月13日)

[Online] <http://www.kamakuranet.ne.jp/~someya/publications.html>